

イギリスにおける日本茶道

千葉知恵子（東京外国語大学大学院）

はじめに

私は自分の祖母と母が茶道講師のため、小さいころから茶道に親しんできた。茶道は日本文化を代表するものとされ、現在多くの外国人が茶道を通して日本文化を理解しようとしている。はたしてどのように私達は茶道を紹介すればよいのだろうか。とくに紅茶文化を持つイギリスでは現在どのようなことを行っているのか、茶道文化をみるイギリス人の目は何処にあるのか、そして茶道の国際化の問題点がなんであるか追究してみたい。

茶道とは日常の基本である。茶を飲むことと食事をする行為を通して人々との交流は深められていくものである。日常性に根ざしたもから生み出される世界は非日常的な精神世界が生まれる。茶には4つのファクターがあり、それは社交的、修行的、芸術的、儀式的なものである。また茶道にはいろいろな要素がある。陶芸、漆器、織物、書や絵画、歴史、文学、思想、宗教書、生け花、衣、食事、住居建築、庭園、芸能など包括的で複合的な文化である。

日本での茶道の位置づけ

現代では茶道が一般化、大衆的日本の伝統文化の一つとして、また茶道の持つ礼儀、作法の側面を教育に役立てようと学校のクラブ活動で行われている。また茶道の持つ癒しの力が福祉施設分野で活躍している。国際化が進み、茶道を含む日本の伝統文化が海外に紹介され、従来になく広がりをもってきた。

茶道の歴史

- 8世紀 お茶の伝来
- 12世紀末 禅の仏教徒達が中国から日本にお茶の種を持って来る
仏教徒の儀式、上流階級の薬として抹茶が使われる
次第にギャンブルとして飲茶勝負が流行した
- 14世紀 禁止される
その後、今存在する茶道が少しずつ出来上がる
- 16世紀 (1522-1591千利休) 茶道の成立

19世紀末 立礼を創案
15代続く

立礼について

亭主、客が椅子にすわり、点前も机の上で行う方式

今では海外での茶会の場合などでも大活躍

明治5年の京都博覧会において始めて使用される

伝来の方式を後世に正しく伝えるべく、伝統を守りながらも、新たな時代の流れをいち早く感じ取り、時代に即応した茶法として考案された

当時は他流派から伝統を破るものとして、批判もあったが今となつては常識的な点茶方式のひとつとなっている

現在の日本における茶道の国際化及び国際活動状況

(表千家、武者小路千家の各流派がそれぞれの国際茶道活動を行っているがここではとくに裏千家に焦点をおきたい)

1 利休居士15代鷗雲齋家元千宗室について

昭和39年、裏千家家元を継ぐ千利休から数えて15代目「一碗からのPeacefulness」を合言葉に、世界60ヵ国を訪問するなど、国内外で茶道の普及に力を注いできている

2 外国人研修コース(みどり会) 淡交会国際部

裏千家は日本語の話せない茶道留学生のための茶道研修プログラム「みどり会」を設け、1974年以来既に400名以上の生徒が卒業。目指してきているのは、適確な英語で表現をすることにより、海外に茶道の真髄を普及することである。生徒は海外社中をはじめ、裏千家と交流のある国の交換留学生や、茶の湯クラスのある海外の大学からきている。優秀な生徒には千宗室家元個人の奨学金制度が設けられている。茶道について知りたいが、彼らの中には日本語が全く分からない人もいる。また日本の生徒よりも茶道の動作の意味をよく聞く。

3 裏千家茶道国際セミナー-Urasenke International Association 淡交会国際部

(茶道を外国人にどのようにして教えるかというセミナー)

- 1) 外国人に教えるにあたっての心構え
- 2) 日本のわびさび、茶道の哲学である代表的な和、敬、静、寂の四規、利休七則、一期一会、また茶道の歴史、よく引用される短歌や俳句をどのように説明すべきか
- 3) 茶道独特の言い回しを英語でどのようにいうか

4) 世界各国の要人への茶道紹介—外務省、国際交流基金、各国大使館などからの要請を受け、海外から日本を訪問する要人への茶道紹介また、海外に赴いての献茶も多い

5) 汽外茶道具—茶道の未来を考えた国際色豊かな茶道具の取り合わせが考えられている。海外のうつわと、海外の芸術家によって茶道具として作られた作品による四季の取り合わせ

夏 水指 時代ウェッジウッド製

国外の状況

海外出張所 支部 同好会と茶室

1951年ハワイに第1号の裏千家海外支部が誕生したのを最初に今日では世界29カ国80余カ所に茶道の拠点がある。茶道のみならず日本文化の紹介と友好のシンボルとして大きく貢献している

イギリスの紅茶文化の歴史

コーヒー文化から紅茶の文化へヨーロッパから訪れる商人たちを通して、コーヒーハウスは急速にヨーロッパに広まった。ヨーロッパで最初に隆盛をみせたのはイギリスである。ロンドンでは1651年に初めてコーヒーハウスが開店。1683年には3000件、1714年には8000件へと急増した。流行の原因はコーヒーハウスには内外の情報が集まったこと、身分の別なくコーヒーを飲みながら自由な会話や議論ができたことである。ところがヨーロッパ中がコーヒーから茶への劇的転換が起こった。17世紀末まで凌駕したコーヒーハウスは、18世紀末には見られなくなる。1739年には551軒に激減した。衰退の背景として、アルコール業界からの反対運動、公権力による規則などと共に、女性の猛烈な反対運動があげられる。コーヒー文化はイギリスの家庭に入り込むことが出来なかった。それはコーヒーハウスの原型が男中心のイスラム世界に由来するものであることと無縁ではない。男達は夜にコーヒーを飲み外に出し、友人とあったので家族同士のつきあいがすたれたと述べている。

18世紀には郊外にテীগーデンが造園され、有名なガーデンがいくつもできた。ガーデンで茶を飲む習慣が貴族の邸宅にとりいれられて、イギリス独自のテエ文化が形成される。庭は女性にも楽しみを与える場所となり、散歩道が設えられ、イギリス女性は好感を示した。茶が庭と共にとりこまれ、男性だけの社交ではなく、家族同士の付合の場を提供したのである。テエを取り入れることによってイギリス社会は過激な革命をまぬがれたとさえいわれる。18世紀に紅茶の需要が高まり、イギリスでは磁器は作れないものの、ウェッジウッドやロイヤルウエスターに代表されるボーンチャイナの染め付けの大量生産に成功し、18世紀中頃からは柄のついたカップを作り始め、それが主流を占めるようになる。また王立植物園による海外からの組織的な植物の導入と品種改良によってイギリスの庭の色彩は豊かになった。19世紀にはイギリス人は紅茶をやめられなくなった。イギリスでは茶の自給をインド、セイロンでの茶のプランター

ションによって成功した。1823年アッサムに自生していた新種の茶樹が発見された。(川勝)

イギリスの状況

1) 裏千家ロンドン出張所活動British Museumでの月2回のデモンストレーション

ロンドン出張所週2回の稽古初釜除夜釜など季節ごとの茶事季語の翻訳

Micheal Soei Birch (1936-1997) 第二次大戦後に初めて今日庵で修業した外国人であり、1976年に英国に戻りロンドン支部を創設する

2) 大学学校のコース

1 イギリスの現地校

University of London SOAS 日本語 Special lecture

Oxford University 日本語 Special lecture

Oxford Brookes University 社会人類学 茶室を設計し、資金集め中

Cambridge University 1998茶室を建築

Univeristy of Durhan 日本語哲学

Exeter College of Art & Design 日本文化茶道コース

Addingim Middle School West Yorkshire 日本

West Slaitwaite G.E. School Huddersfield 日本

2 イギリスにある日本の学校海外子女教育振興財団に現在調査中

3 日本文化団体Japan Information And Culutural Centre 日本大使館日本文化週間を開催し、日本文化を紹介することで相互理解と人的交流をはかっている。その中で茶道も取り上げている。

4 茶室庭園

Victorian Albert Museum

Portland Park 1994 日本庭園、茶室を造園、建築

British Association For Japanese Studies

Scholaers at Universities, Colleges, Polytechnics& Institutes Of Higher Education

5 茶道具(陶芸)

バーナード リーチ (1887-日本における外国人陶芸家の第一号)

チャールズ スペイシー (1949-

ジェニフアーリー (1956-

紅茶文化と茶道文化

茶道文化待合、露地、茶室、茶道具一式、床の間、絵画、花花器、懐石料理、調理道具、風景式庭園、わび茶の文化、虚構性、

非日常性

紅茶文化

紅茶、ティーポット、カップ、ソーサ、スプーンの茶道具一式、ミルク、砂糖、サンドイッチ、スコーン、ジャム、クリーム

ヨーロッパ大陸の庭園とは異なり風景式庭園

アフタヌーンティーという生活文化日常性

椅子、テーブル、ソファなどの住宅のスタイルと結び付いている

スプーンをカップのなかに入れたまま飲んだり、音をたてて啜らないといったマナーや仕草が結び付いている

茶の文化は唐、宋代に展開し、東西に広まり近代の日本の茶道、イギリスの紅茶となった。日本とイギリスはそれぞれ大きく茶の文明と関わっている。それぞれの文化は複合的なものである。庭園－茶道と庭は一体であり、待合－露地－茶室の空間を中心として自然の山水を取り込んだ市中の山居である。またアフタヌーンティーと英国の風景式庭園とは一体であり、それは「市中の山里のイギリス化された形である」といわれている。（川勝）

日本における茶道修練者の意識は大屋幸恵によって調査考察されている。現代的意味、社会的な機能などの問題点が明かとなった。しかしイギリスにおける各階層への調査は残念ながら未だ行われていない。より明確なイギリス人の茶道に対する位置づけを明かにするため、トータルコミュニケーションとしての茶の認識伝統文化の位置づけ、社会的な文化的価値の序列をイギリスの紅茶とイギリスの茶道両面での平行調査することが今後課題となると考えられる。

問題点とこれからの課題

「The way of Tea」 よく使われる「Tea Ceremony」ではない

日本人のごく限られた人々による、洗練された儀式的なもの、あるいは興味深いエンターテイメント、遊び、生活に全くかわりのないものであると思われがち

緑茶を飲んだことのある外国人はたくさんいるが、抹茶を飲んだことのある人は少ない。できるだけ抹茶特有の味を楽しんでもらおうとつとめているが、身体によくても、味に馴染みがないから飲めないという感想が多い。薄茶が手軽に楽しめることを知れば、もっとたくさんの人に親んでもらえる。

茶道文化の研究のあり方

書店にみられる茶の湯教美書の多くが、茶人の逸話を羅列するにとどまる。茶道の研究が茶道自体に回帰し、自己完結する強い傾向がある茶道研究を、文化史なり文学史のうちに位置づけようとする視点が欠落している。

包括的で複合的な文化から成り立つ茶道をトピックワークで触れてみる

建築の方に興味がある人は住居、茶室から、美術の方に興味がある人は陶芸、漆器、織物の方向から学習をしていく。そして全員で一つの茶会を行うことにより、様々な分野のものを総合学習していくことができる。また自分の興味のある分野から学習するので、強制的にならず親しみを持ちながらできる。このようなものを初等、中等教育のトピックワークでとりあげたらどうだろうか。実際にこのようなトピックワークを日本で行っている教育機関もある。今まで調べてきて実際にわかったことはイギリスの初等、中等教育機関では茶道は日本を知の一貫としてスペシャルレクチャーとして取り扱われていることが多い。高等教育機関では、日本語コースはいくつかの大学で存在するが茶道は日本文化の一つとしてまれに取り上げられているだけである。アカデミックを重視するイギリスの大学では、茶道の哲学、文学という学術的な面からアプローチすればよいのではないか。茶道は伝統的な芸道といわれ、長い間日本文化を形成してきたが、日本でも学校教育の明確なカリキュラムや方法論が確立されなく、学校教育と同等の「教育」と考えられてこなかった。しかしながら、茶道の総合文化としての特質は、異文化として、そして比較文化としての日本文化を学習するうえで有効であると考えられる。今回調査した結果、日本語、歴史、美術、能、歌舞伎などの芸能、建築など別々の独立したコースはあるが異文化提携の総合学習のできるカリキュラムがあまり行われていなかったと感じた。茶道文化の活動の報告書、統計が少なくまた海外における日本茶道について研究をしている研究者が少ないのが実際の現状である。以上が平成12年3月の調査状況である。4月からはイギリスで2ヶ月程、現地調査と茶道のデモンストレーションを実施する計画である。

参考文献

The Book of Tea	岡倉天心	1908	
茶道入門	千宗室	1996	淡交社
茶の美	千登三子	1999	淡交社
茶道	千宗室	1983	茶道教育センター
茶席でゆとりと楽しみを	千宗室	1996	日本放送出版協会
日本文化のゆくえ茶の湯から なごみ	熊倉功夫	1998	淡交社
茶道文化論	千宗室監修	1999	淡交社
茶の文化と文明	川勝平太		
現代茶道修練者の意識	大屋幸恵		
茶の文化その総合的研究第一部	梅棹忠夫監修		淡交社
茶とヨーロッパの食事文化史	角山栄		
茶の英国定着の要因	齊藤楨		
食事文化西洋と東洋	石毛直道		
お茶の巡礼	ピーター・ミルワード	1997	河出書房新社